

## 信仰と武道

酒井利信

Budo and religion.

SAKAI Toshinobu

本稿は、平成 20 年度学内プロジェクト研究「信仰と武道に関する文化教育教材の開発」において、教材用として書き下ろした原稿である。

### ・信仰宗教と武

新渡戸稲造は 1900 年に『武士道』を世に出している。“BUSHIDO: The Soul of Japan”と題して英文で書きあげられた日本人論である。その序文で、新渡戸はこの著を書くにいたったいきさつを語っている。ベルギーの法学者ド・ラヴレー氏の質問に端を発する。「日本の学校では宗教教育はなされていないのですか」。つづけて「宗教なしに、どうして道德教育を授けることができるのですか」と。そのとき新渡戸は、自ら子供の時に学校で道德教育を受けたことがなかったため、この質問にはじめ答えることができなかった。しかし自分のなかで善悪の観念を作り出させているものを考えてみると、それが武士道であることに気づいた、というものである。西洋における宗教の人間教育としての役割は絶大である。日本において、これにかわる役割を担ってきたものとして武士道を取り上げ、世界に紹介した。武を生業とした者たちの生き方の規範についてである。この書は世界的に大反響をよんだ。新渡戸は世界を股にかけて活躍した日本人の代表格である。外からみた日本人の日本文化論である。

もう一人、嘉納治五郎。いわずとした講道館柔道の生みの親である。現在世界に普及し大発展をとげている JUDO も嘉納なくしてはありえない。嘉納は幼少より体格に恵まれず、体力にものをいわせた子ども同士の人間関係の中でずいぶんと悔しい思いをしたようである。こ

のことが嘉納を柔術に引き込んだ。天神真楊流<sup>てんじんしんようりゅう</sup>や起倒流<sup>きとうりゅう</sup>といった柔術を随分とやったようである。そこで彼が思ったことは、柔術は体力的にも精神的にも効果があるのみならず、この勝負の理法は社会に応用できる、ということであった。さらに嘉納の面白いところは、これが青少年の教育に役立つと考えたところである。身体的な劣等から柔術を修行し、これを身につけて強いものを倒そうとするのは普通の考えであるが、これを教育のなかに位置づけたところに嘉納の特徴がある。実際に彼は、「道」を主張し講道館柔道を創ってからも、単なる武道家ではなく、学習院教頭や熊本第五高等学校長、東京高等師範学校長などといった教育畑を歴任するなど、根っからの教育者である。面白い出来事がある。嘉納は明治二十二年(一八八九)にヨーロッパへ教育と宗教事情の視察に赴いている。それまでに宗教の力の絶大なことを見聞きしてである。渡欧してみた宗教の現状に対する感想は、壮大な寺院を見てその力の大きさを再認識する一方で、信者らの言動からかつての力がなくなっていることをも実感したようである。いずれにせよ嘉納は宗教の底力を知っていた。彼はこの役を柔道に担わせたのではないだろう。嘉納自身そうはいっていない。しかしそう思えてならない。文明開化の音がする明治において、西欧火器が幅をきかせる中、術としての武はすでに必要なかった。柔道が近現代の武を主導してきたことは周知のことである。武の多くは教育の中に位置づけられることによって命脈を保ってきたともいえる。宗教の人間教育としての効果を知った嘉納の巧妙な手法である。

新渡戸や嘉納が示唆するものは、武と宗教のもつ人間教育的効果の共通性である。

西洋においてかくも絶大なる宗教の役割を、なぜ日本では一面において武が担ってくることができたのか。それは一つに武が宗教に溶けこんできた、あるいは宗教を取り込んできた歴史があるからである。剣術三大源流の一翼をになう新当流は、鹿島の信仰が育んだものである。また禅を取り込んだ剣術流派は多い。剣禅一如などということばはよく耳にする。ここで注意を要するのは、武と宗教のあいだに接点あるいは共通性がなくては、溶けこむことも取り込むことはできないということである。

端的に言えば、心の扱い方に共通性があり、その接点に剣がある。近世期以降に武の主役を演じることになる剣は、宗教ともいえない民間信仰のときから時間をかけてその中に溶けこみ、そしてこれを取り込んできた。

新渡戸稲造が“The Sword, the Soul of the Samurai”（刀剣は武士の魂）といったことは有名であるが、剣と信仰宗教の問題にまで踏み込んだ考察にはいたっていない。

武が人間教育的な役割を担うようになるその前段階として、日本文化が積み重ねてきたものを、信仰宗教との係わりの中から、剣の思想を中心にひも解いていこうというのがここでのテーマである。

## ・剣による辟邪の呪術

斬らない剣。

おかしく聞こえるかもしれないが、日本では当初、剣は武器としてはあまり活躍せず、どちらかといえば信仰宗教の世界で重用されていた。

斬らない剣。信仰宗教にかかわる剣のひとつの顔がここにある。いまだ宗教とっていいかどうかともわからない日本民族の原初的な信仰の中に、剣は溶けこんでいた。

金属器が大陸から日本列島に伝わってきたのが紀元前三世紀末といわれる。弥生時代の初期である。当時、中国大陸と日本には文明に相当の格差があった。始皇帝が秦王朝を樹立したのが紀元前二二一年、高祖が前漢帝国を創始したのが前二〇二年である。すでに世界に誇る大文明が出来上がっていた。そのころ日本はやっと

縄文時代から弥生時代へ移行したばかりであった。通常は青銅器文明の後、鉄器文明へという順を追うのであるが、海を隔てた日本列島にはこれが足止めされた状態から一挙に押しよせてきたといわれる。相当のカルチャーショックがあったであろうことは、容易に予想ができる。その後、何百年ものあいだ金属器は石器と併用して使われていたようで、いわゆる金石併用時代がつづく。つまり金属器は十分に使いこなされていなかったということである。剣が当初、武器として華々しく活躍しなかったのもこういった事情である。

あまりに高度な文明を目の当たりにした弥生人の驚きようは尋常ではなかったであろう。すぐに日常の武器としては馴染まなくても、非日常的な信仰宗教の世界に溶け込むのに時間はいらなかった。このことは、剣が古代中国においてすでに宗教の世界で重用されていたことに関係する。特に道教において祭器としてつかわれていた。

かんぼ こうじんだに  
神庭荒神谷遺跡から出土した三五八本もの銅剣は、武器としての細形銅剣よりかなり大きいものであった。弥生時代中期末から後期初頭に埋葬されたものであるというが、とても実用のものとは考えにくく、人を斬る道具ではない。どうみても信仰宗教の道具、つまり祭器である。考古学的にも、当初、剣が信仰宗教の祭器として重用されていたことがわかる。

日本の信仰宗教でベースになるものは神道であることに異論はないだろう。これは仏教の仏陀やキリスト教のイエス・キリストのようなカリスマ性をもつ人物が、特定の教義を説いて開いたというものではない。古代日本の風土の中で自然に発生し人々の心の中で育まれてきた民間信仰のことをいい、祖先神や自然神への崇拝を中心とする。後に仏教が伝来したことにより自らの信仰を自覚し、神道というようになった。

日本における剣の思想は、これとの係わりの中で発展してきた部分が大きい。

後に神道と呼ばれるようになる日本の原始信仰には、呪術信仰と神への信仰があったといわれる。

まずは剣による呪術に目を向けてみる。

原始古代人の信仰を反映した神話の世界で、剣はどのように描かれているのだろうか。

『古事記』や『日本書紀』に記されている神話には、剣の武器としての機能を強調するような描写は一切なされていない。むしろヤマトタケルの東征で草薙剣が自ら抜けて草を薙いだり、神武東征伝説で劔の霊力によりこの劔を振るうまでもなく邪神が自然と倒されていたような、マジカルな描写が特徴的である。剣をもって超人的に敵を斬りまくったといった話ではない。

ヤマトタケルの東征での草薙剣や、神武東征での劔の働きから、これらの剣を呪具であると言いきるのはあまりに乱暴なような気がするが、武器としての働きではないことも確かである。

呪具としての剣をはっきりと描写したものに黄泉国神話がある。

イザナギという男神とイザナミという女神は、まず二人で力をあわせて国土を生む。いわゆる国生み神話である。つづいて神々を生む。最後に火の神を生んだことによりイザナミは死んでしまう。イザナギはイザナミの死に泣き悲しみ、死者の国である黄泉国までイザナミのあとを追っていく。一緒に現世にもどることを求めるが、イザナミは黄泉国の神と相談することになる。そのあいだ自分の姿を見てはならないと念をおしたにもかかわらず、イザナギは待ちきれずに火をともして御殿の中に入ってしまう。そこで見たイザナミの姿は、蛆がたかり八つの雷神が体のいたるところに生じるという醜いものであった。頭には大雷が、胸には火雷、腹には黒雷、陰部には拆雷、左手には若雷、右手には土雷、左足には鳴雷、右足には伏雷がたかっていた。これに恐れをなしてイザナギは逃げかえろうとする。恥をかかせたとして怒るイザナミは、雷神にイザナギを追わせる。そこでイザナギはもっていた十拳剣を抜いてうしろ手に振りながら逃げかえった。

剣をうしろ手に振るという行為は、敵を困らせる呪術であるという。

十拳剣（十握剣）とは握り拳で十個分の長さのある剣のことをいい、特定の剣をさす固有名詞ではない。よく神代の三大霊剣として十拳剣をいれて説明している場合があるが、それは間違いである。

黄泉国神話は呪具としての剣を振る起源とも

いわれる。

この神話の中で雷神によって表現されているものは穢れのイメージであろう。穢れを嫌う古代人にとって、雷神は邪神として描かれている。イザナギはこれを剣をもって斬るのではなく、呪術的にしりぞけている。

この呪術が、いかなる呪術かといえば、雷神が邪神として描かれていることが示唆するように、邪を辟ける呪術である。これを辟邪の呪術といっている。

剣による辟邪の呪術である。

武器による辟邪の呪術は剣に限ったことではなく、弓矢によるものもある。古代における武の思想を考えるうえで、見落とせない部分であることは確かである。しかし神話を注意深く観察してみると、弓矢による辟邪の呪術より剣によるもののほうが新しい感覚にもとづいていることがわかる。日本列島で弓矢の歴史はかなり古く、外来金属文明である剣の比ではない。キラキラと深い輝きを放つ剣は新しい文明の象徴であり、単なる武器には見えなかった。それ故に後に神格化さえる。ここではあくまでも神聖なものであり、俗っぽく敵を斬ったりはしない。

斬らずして邪惡を制する、まさに霊剣である。

## ・神への信仰と剣

祀られる剣。

ここでは呪術信仰とは別に、もうひとつの神道の顔として、神への信仰に目を向けてみたい。

神への信仰が目に見える形で表れているのが神社信仰である。剣の思想との係わりで注目しなくてはならないのが、まずは熱田神宮における信仰であろう。

熱田神宮は、『延喜式』神名帳にも、年代も古く由緒正しい明神大社として記されており、東海きっての社である。

この熱田神宮は、草薙剣を祀る社である。三種の神器の一つであり、いわずと知れた日本二大霊剣の一つである。

『尾張国熱田太神宮縁起』というものがある。これは平安の初期に書かれたもので、熱田に関する最も古く、また代表的な縁起である。

この史料に、草薙剣が熱田に祀られるようになった由来が述べられている。まず、いわゆる

日本神話にみられるヤマトタケル東征の話をのせる。ヤマトタケルは東征に先立ち、伊勢神宮を訪れそこで倭姫命やまとひめのみことから神剣と袋を授かったこと。駿河で賊に騙されて火を放たれたこと。この窮地に神剣が自ずから抜けて四面の草を薙いだこと。袋の中にあった火打ちで向かえ火をつけ難を逃れたこと。この神剣はもともと天叢雲剣あめのむらくものつるぎといったが、この出来事から草薙というようになったこと。その後、ミヤズヒメのもとに逗留するが、この神剣が光り輝いたことにより、この神のような光を憚って、これをミヤズヒメのもとに置いたまま出かけたこと。ヤマトタケルは、出発に先立ち、この神剣を宝として身の守りとするようにいったこと。その後、ヤマトタケルが邪神の毒氣にあたり死んでしまったこと。等々が記されている。

このあたりは記紀神話、特に『日本書紀』の伝承とほぼ同じである。熱田には、古代神話がベースとなつての信仰が根づいているということである。

『尾張国熱田太神宮縁起』には、その後、宮酢姫は生前のヤマトタケルとの約束から草薙剣を守っていたが、晩年自らが亡くなる前にこれを祀る社を定めてここに剣を移したことが述べられている。これがいまの熱田神宮であるということである。

『尾張国風土記』にも同じような由来が語られている。しかし『日本書紀』などには、草薙剣が熱田に祀られていることは記されているものの、ここまでの詳しい由来は述べられていない。記紀神話をベースとしながらも、最終的に宮酢姫が草薙剣を祀る社として熱田神宮を定めたという伝承は、熱田に独自に伝わったものであるということであろう。

さてここで重要なことは、宮酢姫という斎女さいじょに、神剣草薙が祀られているということである。実はこの剣が祀られるというシチュエーションは、このヤマトタケルの東征最後の部分だけにみられるものではない。もともと草薙剣、正しくは天叢雲剣は、伊勢神宮の斎女である倭姫命から授かったものである。なぜ倭姫命が持っていたかという、伊勢において彼女がこの剣を祀っていたからである。

どういうわけか神剣を祀るのが女性であるということもおもしろい。伊勢に祀る前、大和

の笠縫かさぬい郡むらでこの剣を祀っていたのも豊鍬入姫命とよすきいりひめのみことという女性である。彼女らは斎女であり、いわばシャーマンと考えてよいだろう。どうも女性のシャーマニズム的能力には独特のものがあるような気がする。もともと呪術により集団をまとめあげていた呪術王としての天皇も、これまでに八人（十代）が女性であった。また天皇家の祖先神とされているのが天照大神であるが、これも女神である。邪馬台国を支配した卑弥呼も代表的なシャーマンであるが、これも女性である。

問題を示すのみで、なんらこれ以上の深い考察ができていないわけではないが、いずれにせよ女性シャーマンによって剣が祀られていた。

もはやここでの剣は、呪術の道具でもなく、神を祀る道具でもなく、祀られる対象としての剣である。

では、なぜ剣は祀られたか。

端的に言えば、人々が剣の中に神を見ていたからである。

ヤマトタケルがなぜこの神剣を宮酢姫のもとにこれを祀るように託して置いていったかという、この剣の神のごとく光り輝く様を憚ってである。古代人は遥かに高度な最先端文明であり、かつキラキラと光り輝く金属器に、単なるアニミズムを超えて、神性を感じていたのであろう。神社の社殿の中央に位置する鏡も同種の感覚であると考えられる。

目に見えない神秘的なもので、それゆえ知りたいが知りえない、そういったものを把握しようとするとき、人々は象徴を求める。人々にとって最も神秘的なものの、それが神ということであろう。剣はこの場合、神の象徴である。

ここに日本における剣の思想の一つの姿があるのだが、これは草薙剣に限ったことではない。もう一つの神剣ふつのみたまのつるぎ、節霊剣ふつのみたまのつるぎについても同じである。

次に、石上神宮いそのかみの信仰を覗いてみると、この社には祭神として第一（主神）から第七までであるのであるが、剣とゆかりの深いものとしてまずは主神の布都御魂大神ふつのみたまのおおかみに注目すべきであろう。

『古事記』によれば、初代天皇といわれる神武天皇は、東征の最中に窮地に陥るが一つの神剣の靈威によって助けられたという。この靈剣ふつのみたまの名を佐土布都神あるいは甕布都神、布都御魂



といい、これが石上神宮にあると記す。また『日本書紀』によるとこの剣を<sup>ふつのみたま</sup>節霊という。現在、一般的にはこの剣のことを節霊剣とっている。石上神宮に祀られる主神、布都御魂大神とはこの節霊剣のことである。

節霊という剣を神そのものとして祀っていると考えて間違いではないであろう。剣の神格化である。

しかし神武東征伝説の中で節霊剣は、タケミカヅチという武神の代わりに下界に降りてきて神武天皇を助けている。つまりもともとは神そのものではなく、やはり天上界にいる神の力を下界で象徴的に発揮する存在であった。やはりベースにあるのは、神の象徴としての剣の姿である。

もう一つ忘れてならないのが鹿島神宮である。東国鹿島のうっそうとした森の中にたたずむこの社には、祭神であるタケミカヅチの象徴として節霊剣が安置されている。後に造られたと思われる長大な刀剣が、二代目の節霊剣として納められているのである。国宝であり、現在一般に見ることもできる。

剣は、日本人がそれまで、列島の風土や自然の中で見たこともない深い輝きをもっていた。しかしそれだけではない。剣は、きれいに光り輝く美しい面と、それとは裏腹に触れれば鋭く他を傷つける、かつて経験したことのない危険な面と、二面性をもっている。そのことに気付くべきであろう。まさに諸刃の剣である。人々は剣の中に神を見ていた。神とてなにも人々に加護を与えるばかりではない。時として荒ぶる神ともなる。そもそも日本の神は二面的である。諸刃の剣は日本の神を象徴するにはうってつけであった。

日本人はこういった象徴的な思考を好む。

神の象徴としてまつられる剣。ここに日本刀剣思想の基礎がある。

#### ・修験道と剣

不動明王の<sup>ちえ</sup>智慧の剣。

草薙剣と節霊剣は、日本二大霊剣といわれるものである。おもに神道に係わる霊剣である。しかし、これに不動明王の智慧の剣を加えて三大霊剣とするべきではないかとさえ私は思う。それほどこの剣は日本における剣の思想にとっ

ては重要な位置をしめるものである。

日本の信仰宗教は排他的でないところに特徴がある。

日本文化史の中で仏教の果たした役割は大きい。六世紀に伝えられたが、日本における受容のされかたというのは、仏教が後に神道と呼ばれるようになる従来の信仰にとって代わったり、あるいは神道とは別に仏教は仏教で独自の路線を歩んだりといったものではなかった。日本古来の神への信仰と、いわゆる輸入されてきた仏教は、奈良朝前後から交流をもち平安時代にはお互いが融合するような関係を作りあげていった。いわゆる神仏習合である。この神仏習合の最たるものが修験道であり、これが剣の思想において重要な役割を果たすことになる。

修験道については多少説明が必要であろう。山伏の思想である。

ベースになるものは神道的な山岳信仰である。深い樹叢におおわれた険しい山々は神霊のすむ他界であり、日常の生活圏からは区別されるものであった。古くから日本において山は神々のいる聖地であり、ここで日本民族に特有の信仰が培われてきた。こういった土壌に後から伝わった仏教、そのなかでも特に最澄・空海がもたらした密教が融合して出来あがったものが修験道である。山岳修行を専らとする信仰宗教であり、飛鳥時代から奈良時代を生きたといわれる<sup>えんのおづめ</sup>役小角が開祖ともいわれている。鬼神を操るといわれた呪術者である。

修験道を修行するものを修験者あるいは山伏などというが、そういった修験の修行を専らとする行者のみならず、中世期には一般の人たちにもこの信仰は大きく広まっていたようである。修験道のおもな霊場で有名なものとして熊野三山がある。本宮・新宮・那智の三つの霊場をまとめて熊野三山という。現世利益と来世の加護を求めて、人々は行列をなしてこの神仏習合の聖地である熊野を訪れた。有名な蟻の熊野詣である。これほどまでに盛んな信仰であったということである。神仏習合といったファジーな流れがいかに関西に日本人に適していたかということである。これはあくまでも一般人の話で修験者とはちがう。

では修験者とはどういった宗教活動を行う人たちか。端的に言えば呪術をおこなうシャーマ

ンである。人々に災いをまねく邪神や生死霊、動物霊などを呪術により排除する。これを調伏<sup>ちようぶく</sup>という。しかし修験者たちはもとよりこういった調伏を行う能力を備えているわけではなく、呪術を行う能力を得るために、つまりシャーマンとしての資質を備えるために、聖域である山の中で激しい修行をする。山の峰々をひたすら歩きつづける回峰行、不眠不臥の参籠行、そのほか滝にうたれたり火渡りをする様子など目にすることがあるだろう。昔の話ではない。現在もこういった修行を行っている人たちはいる。千日回峰行など想像を絶する修行である。

修験者のことを山伏というが、これは山による修行をおこない、それによって得られた呪力で調伏を行うという意味である。

修験者の主な崇拜対象は不動明王である。古来の山岳信仰では山の神々に対する信仰であったのであろうが、修験道では不動明王という仏を崇拜する。これも神仏習合のゆえである。鎌倉前期の説話集『宇治拾遺物語』<sup>そういゆ</sup>には、比叡山回峰行の開祖といわれる相応和尚が葛川の滝で修行をしていたときに不動明王の頭にのって都卒天<sup>とそつてん</sup>にいったという話がのせられている。不動明王は、平安時代末期から鎌倉時代には修験道の主要な崇拜対象となっていたようである。

不動明王とは恐ろしい形相をし、片手に降魔の剣をもち片手に羂索をもつ仏である。もともと中国では、不動明王や朱雀明王といった明王といわれる仏たちは、呪的な降伏力をもつ密教特有の忿怒の仏たちをいった。敵意のあるものや障害をもたらすものを降伏させることが、この仏の働きである。つまり調伏が彼らの役目である。

不動明王に対する信仰は修験道に限らない。日本中どこにいても不動信仰は盛んで、これほど庶民に親しまれる仏もめずらしい。災厄の原因となるものを排除してくれる降魔の仏であるからか、忿怒の形相が日本古来の荒ぶる神々とオーバーラップするからか、理由はわからないがとにかくその恐ろしい顔つきからは想像できないほど人気がある。

逆に考えればこのことは、この仏が日本人に馴染みやすいという証明でもある。だから日本古来の山岳信仰をベースとする修験道においても、主要な崇拜対象にまでのぼりつめることが

できたのではないだろうか。

確認すると、不動明王という仏の特徴は降魔、つまり調伏<sup>ちようぶく</sup>である。不動明王は調伏をするのもっている智慧の剣を使う。もっとも大事な役割をこの剣で行うのである。いわば調伏という不動明王の特徴を表わすのがこの降魔の剣である。このことから智慧の剣は不動明王のシンボルとして扱われるようになる。たとえば刀剣に彫り物をするのがよくあるが、智慧の剣を模した形を彫りこむことがある。これだけで不動明王を表わしているという。

不動明王の働きは調伏。これを智慧の剣で行う。ここが重要なポイントである。

ではこの不動明王を主に崇拜する修験者は、こういった呪術宗教活動をしているのだろうか。ここには独特の思考形態がある。修験者が悪霊などを呪的に排除する調伏を行っていることはすでに紹介したが、こういった呪術を行うには大前提がある。不動明王と一体となるということである。そう観念するということである。

調伏にあたって「不動はすなわち我であり、我はすなわち不動である。本尊の御心がわが身にはいり、わが心が本尊の身にはいる。本尊と我と二つに別れることはなく一身である」と観想することが行われるという。

また修験者の装束はそれぞれに意味をもつが、彼らは衣体から不動明王と一体になろうともする。『溪嵐拾葉集』<sup>けいらんしゅうようしゅう</sup>には「問。山伏の行体はどういったものか。答。不動の形体である」といった記述があるが、これはそのことを表わしている。

装束によって不動明王と一体化しようとする思考は、「山伏問答」にもうかがうことができる。修験道儀礼には護摩がある。護摩木を焚いて本尊に祈るのである。屋外で護摩を焚くときに多くの修験者が集まることがあるが、その際に「山伏問答」というものが行なわれる。修験者として知っていなくてはならないことを問答し、護摩儀礼に加えるべき者かどうかの判断をする。例えば「そもそも山伏の二字の意味はなにか」との問に、「山伏とは山にはいり無明煩惱の敵を降伏するという意味である」と答える、といったものである。その山伏問答のなかで「腰におびた利剣はなにか」との問に、「不動明王の智剣であり、煩惱魔障を破断するものである」

と答える部分がある。

山伏のもつ剣は不動明王のもつ智慧の剣と一緒にであるということである。そう観念する。そのことによって彼らは不動明王と一体になろうとする。

智慧の剣は調伏の働きを特徴とする不動明王のシンボルであった。この智剣と、不動明王と一体となった修験者がもつ剣は同じものであり、そのことによって彼らは調伏という呪術を発揮することができるという思考である。修験者は自分のもっている剣が不動明王の智慧の剣であると観念することによって、実際に敵対するものを降伏させることができる。

これが夢物語ではなく実際の宗教活動として行なわれているところに素晴らしさがある。この独特の思考形態なくして修験道儀礼は成り立たない。現代的合理主義に慣らされた我われには理解しにくい考え方、現象であることは確かである。しかし事実であるところが面白い。

重要なことは、普通の人間が装束を真似していくらこう観念してもどうにもならない。修験者が不動明王と同じ機能が果たせるようになるには、山の中での凄まじい修行が前提としてあつてのことである。

呪術にかかわる剣と神道的な神の象徴としての剣はダイレクトにつながることはあまりなかった。調伏というのは仏教用語であるが、これとて辟邪の呪術である。修験道では、呪術の道具としての剣と信仰対象の象徴としての剣が一致しているところが非常に興味深いところでもある。

ポイントは、不動明王と同じだと観念することによって同化する、というところである。

最後に注意しておきたいことがある。通常、修験者が調伏する対象は、怨敵であつたり邪鬼であつたり、死霊、悪魔、悪霊、狐狸、荒神、生霊であつたりといった、外敵に特化して語られる場合が多いが、どうもその限りでないということである。『しょうふどうきよう聖不動經』という經典がある。これは偽作との説もあるが、広く行者のなかで訓誡することを慣例とされていたもので、修験道を知るうえで重要な史料である。このなかに「大智の剣をもって貪瞋癡とんじんちを害する」とのフレーズがある。貪瞋癡（痴）とは仏教用語で、人々の善い心を害する基本的な煩惱のことであ

る。人の心に係わることである。調伏は、智慧の剣によってなされるものであるが、その智剣によって斬られるものは心であるということである。調伏には、内面の教化という方向性もあるということを描きおきたい。

不動明王と同化することによって、剣をもって伏すべきものは、外敵のみならず人の内にもあつた。

不動明王の智慧の剣。

中世以降の日本における剣の思想において、非常に重要であることはまちがいない。

### ・武の宗教性

武の宗教性というべきか、信仰宗教の武道性というべきか。ことさら精神の問題に傾倒していくのが日本の武の特徴である。それゆえに信仰宗教の問題と深く係わってきた。

新渡戸稲造が“BUSHIDO”として世界に紹介した武士道は、儒教的色彩が非常に強い。しかし武を生業とする者たちの生き方と儒教がむすびついたのは随分後の話で、実はそもそもの武士道はもっと土俗的な日本人に独自の信仰がベースとなっているように思う。日本文化の多くは中国伝来のものであり、ご多分にもれず儒教もその一つである。近世期を中心に日本国内で大いに発展し、武士道もその流れの中にあることは確かである。しかしその本質の部分は違うのではないかということである。日本人の本質は中国的には理解できないように思う。

竹本忠雄という博識でエネルギーな学者がいる。フランスでの活動をもとに論陣をはる。外からの目でみた日本人論を鋭く説き明かす数少ない論客である。何よりも日本の聖なる精神性をこよなく愛している。竹本はその著書のなかで、「『三国志演義』を逆さまに振っても、武士道はでてこない」というようなことをいう。まるでケンカ腰のようにも見えるが、謀りの武士道ではない、日本人に染みついた正々堂々の武士道が本当の姿であるといわんばかりに。最近ようやく、なるほどと感ずることができるようになった。しかし、まだまだ感じる段階であり、学術的に論証できるまでにはなっていない。

武の宗教性について注意しておかなくてはならないことがある。ときには信仰宗教の中に身をおき、信仰宗教との係わりの中で工夫鍛錬を

つづけ極意を悟っていった場合のような宗教性と、武芸者が自らの激しい修行の体験の中で獲得した境地や技術を、宗教の言葉で説明した場合の宗教性とは明らかに違うということである。乱暴な言い方をすれば、本質的な宗教性と後づけの宗教性である。

武士道の儒教性は、その本質が実は日本人の本来的な信仰に根ざしたものであるとするならば、後者の傾向が強いといえよう。

次に、近世の武は禅に代表される宗教性を強くもっている、というような説明がされることがある。特に剣術についてはその傾向がつよい。柳生宗矩<sup>むねのり</sup>が著した『兵法家伝書』は多くの禅語を駆使して洗練された心法論を展開するものであり、これが近世を代表する武芸伝書であることから、特に剣術の禅的宗教性がいわれるところでもある。禅僧である沢庵宗彭<sup>たくあんそうほう</sup>の影響をうけ、三代将軍家光との親密な関係から、綺麗な伝書を書き残そうとした意図が垣間見られる。使われているのは、説明概念としての禅語である場合が多い。父である宗厳<sup>むねよし</sup>とともに必死の思いで獲得してきた剣の妙技、とくに心法を、禅語によって説明している。こういった意味での宗教性である。

もちろんこれを説明できるのは、柳生の剣と禅修業との共通性があつてのことであることは確かであるが。

宗矩は『兵法家伝書』の中で、特に何ものかにとらわれる心を嫌いこれを病<sup>やまい</sup>というキーワードによって表現した。この病という語は仏教用語ではなく、沢庵自身は著作の中ではこういった心を煩惱という仏教用語をもって表現し、病の語を使用していない。逆に『兵法家伝書』では煩惱の語は使用されていない。沢庵の影響を強烈にうけながらも、最も重要なキーワードに禅語を用いていないことは逆に面白い。

儒教にしても禅にしても、武にとっては後づけの宗教性といった印象を拭えない。時代の流行にのったようなところもあったであろう。本質はそこにはない。今でもわざわざ英語やカタカナをつかって言う場合があるが、このほうがイメージしやすいといった程度で、本質が欧米文化にあるわけではない。当時、似たようなことがあったとも考えられる。

そもそも儒教や禅が剣の思想と係わることは

ほとんどない。

剣の思想がかかわるのは武の本質的な宗教性の部分である。

伝説によると、塚原ト伝は鹿島神宮で壮絶な修行をして、その結果タケミカヅチという神のお告げにより極意<sup>あいつ いこう</sup>を得たという。愛洲移香<sup>あいすいこう</sup>は鶴戸神宮で、飯篠長威<sup>いひささちやうい</sup>は鹿島・香取両神宮で、上泉伊勢守は下鴨神社で参籠修行をしたという。それが史実であるかどうかは別にして、神道の修行観が支配的である。まさしくいまだ神道とっていいいかどうかもわからない、土俗的な日本民族に染みついた信仰の中に身をおいての修行である。剣豪が本当の強さを獲得していくプロセスに神道が大いに係わっている。この宗教性が後づけではなく、本質的なものであることはいうまでもない。

剣を神の象徴として祀る社を中心とした信仰を背景にして塚原ト伝が獲得した技が、神道から生まれたことは疑う余地がない。神道における、剣を使つての辟邪の呪術から生れた、霊剣<sup>みたまのつるぎ</sup>呪振の太刀といった技などはその最たるものである。ト伝を中興の祖とする、新当流に伝わる技である。

新当流における辟邪の呪術は、誦<sup>ふつのみたまのつるぎ</sup>霊剣という神剣を接点とすることによって、タケミカヅチという神と観念的に一体化し、発揮される妙技であった。剣術家のもつ剣はタケミカヅチの誦霊剣と同じであるとの考えのもとに、神の威力が発揮できるのである。現代社会における合理主義ではこういった考え方は容認されない。いわゆる観念論である。しかし当時はこう考えることができた。

これにはひとつに中世以降に展開した修験道的なものの考え方が無関係ではないように思う。修験道において山伏は、自らの剣を不動明王の智慧の剣と同じであると考えた。このことによって不動明王と同化し、この仏と同じ調伏という呪術を行う。辟邪の呪術を行うために、神仏と同化する。その接点に剣がある。こういった考え方である。不動信仰が世間一般に広まり、あるいは修験の一大霊場である熊野への信仰が蟻の熊野詣といわれるほど一般化していたことからして、こういった考え方が修験道以外に広まっていたことは十分に考えられる。

事実、剣術と修験道の関係は意外と深い。『本



朝武芸小伝』によれば、天流の創始者である齊藤伝鬼房も、鶴岡八幡宮で参籠修行をしたという。このときに、同じく参籠していた修験の行者と剣の術について談じあい、実際に試しあいなどもして妙旨を悟ったという伝説である。天狗は山伏のことであるといわれるが、天流関係の伝書には天狗が剣術をする絵の描かれたものがある。また天流のみならず新陰流関係の伝書にも天狗の絵が見られる。これも、剣術と修験道の密接な関係ゆえであろう。

塚原卜伝がシャーマン的な資質をもっていたことは明らかであると思うが、卜伝に限らず他の剣豪たちにも多かれ少なかれそういった傾向はあったのではないだろうか。そういった呪術にも似た能力を得るために彼らは参籠に代表される苦行をするのである。これと、修験道において山伏が山中での苦しい修行により、調伏の能力を獲得していくプロセスとは相通ずるものがあるように思う。

苦行を前提にして神仏と同化する。これに剣が重要な役割をはたす。こういったことは神道から修験道に流れる呪術の本質に係わる部分である。剣術はこういった考え方の中に身をおきながら、呪術に通じる技術を生み出していった。

神道や修験道といった、剣術の本質に係わる宗教性の一つの姿である。

日本の武は精神の問題に収斂されていくところに一つの特徴がある。辟邪の呪術も必然的に自己の内側に向けられるようになる。

新当流や示現流にみられるような“我も斬り彼も斬る剣”も、神道や修験道の流れの中にある。

不動明王のもつ智慧の剣は、外敵に対する調伏の道具であったが、一面では三毒と表現されるような煩惱を斬り払うものでもあった。そもそも中国仏教において智慧の剣とはそういうものであった。仏教においては、剣の思想として特筆すべきものは殆どない。しかし、この智慧の剣のみ注目値する。『華嚴經』には、「智慧の剣をもって諸々の煩惱と、外道や魔怨をくだき滅ぼす」と書かれている。智慧の剣は、外敵と自己の内の両方向に働きかける辟邪の剣であった。こういった剣の思想が剣術に介入している。示現流において剣をもって貪瞋癡(痴)の三毒を切断するという考え方をするのも、智

慧の剣と無関係ではないはずである。

さらに自己の煩惱や邪心を斬るのは、心の剣で観念的に斬るしかない。こういった精神操作は、剣を心の象徴としてとらえる思想が根底になくは成り立たない。心の剣で斬るのであるから。日本の信仰には剣を持ち主の心を表わすものとして捉えるような考え方があった。そもそもこういった剣の思想がありその流れの中で“我も斬り彼も斬る剣”といった技術が生れてきたということであろう。

持ち主の心をあらわす剣。ゆくゆくは「剣は武士の魂」といったフレーズにつながるであろう。さらに武士は自らの誠意を表わす剣で腹を斬り、始末をつけたのであろう。海外で有名、かつ相当の誤解もされている切腹。これを剣の思想から考えることもできるはずである。

宗教である以上、単なる術と係わることだけではすまない。禅僧沢庵が『不動智神妙録』のなかで宗矩の言行を諫めたように、人間としての生き方に係わってくる。また武道そのものにこういったものを志向する理由が内在してもいた。近世以降、平和な時代において武を生業とする武士は為政者であり、単なる武力にものを使わせた乱暴者では世間から許されなくなったためである。

剣の思想についても、当然、宗教との係わりから自己の内側に向いた方向性は、人間形成の論にまで展開することになる。神聖な剣により自己の内にある邪心を斬りすて、心の立派な武士として生きる。ひいては心の美しい人間として生きる。剣の徳による人間形成である。

この部分だけを拾っての新渡戸の“The Sword, the Soul of the Samurai”(刀剣は武士の魂)の言説が深みをおびないのは当然といえば当然である。そもそも儒教に剣の思想はないのであるから。武の宗教性は、剣の思想に焦点を当てたときに、修験道をも含めた神道の流れの中に、その本質的な部分の一つが見出せる。そしてこの宗教性が、儒教とは別の本質的な人間形成論を武のなかに育んでいった。なぜなら、それが日本に独自に発生し、日本人に染みついた信仰であるから。

こういったバックボーンが、現在の武の人間教育的役割を可能にしている。

これだけの背景を蓄積してきてようやくであ

る。

しかし、こういった武の本質的な部分にかかわる宗教、つまり後に神道といわれる信仰は、いつの時代かに武と結び付いたのではなく、そ

もそも武と係わっていたところが面白い。古代神話の頃の初めから。

信仰宗教の武道性である。